

イヌぞり模型

コリヤーク

カムチャツカ

長さ 32cm

北方民族博物館だより
—第29号—

企画展「グリーンランド ～地球のてっぺんの大きな島～」 2
講座「ミュージアム映写室」／寄贈資料紹介 4
お知らせ 5
News 6

「グリーンランド ～地球のてっぺんの大きな島～」

GREENLAND: The Large Island at the Top of the World

北アメリカの極北地域は、人類誕生の地アフリカから距離的にも自然環境の面でもかけ離れた場所といえます。この地で暮らしてきたエスキモー(イヌイト)は、最も寒冷な環境に適応した文化をきずいてきたと言ってもよく、当館の常設展示でも、多くの資料でその生活を紹介しています。

シベリア(ロシア連邦)からアラスカ(アメリカ合衆国)、カナダ、グリーンランドに広がるエスキモー文化のなかでも、グリーンランドは東端にあたる最終到達地で、文化の形成を考えるうえで重要な場所です。さらに、デンマーク領となっている現在も人口比でイヌイトが圧倒的に多く、言語をはじめとするさまざまな文化を色濃く残しています。本企画展では、現代の人びとのくらしに焦点をあて、遠い国グリーンランドを身近に感じてもらえるよう意図しました。

展示の流れは、大きく「自然」「先史」「極地に適応した文化」「歴史 ～バイキングと植民～」 「現代の生活」に分け、トピックスとして「500年前の生活」「ことば」「グリーンランドの博物館活動」「資源としての海獣類」「グリーンランドの漁業」「観光」をとりあげました。以下にテーマごとの概要と主な展示資料を紹介いたします。

<自然>

北アメリカ大陸の北東、北緯60～83度に位置する世界最大の島グリーンランド。広さは日本の国土の約6倍だがその80%以上は氷に覆われており、複雑に入り組んだフィヨルドの海岸線に点在する町に、約55,000人の人びとが暮らしている。

気候は、南北に長い島だけに地域による変化が大きく、北部では最暖月の平均気温が4～5℃、年間平均気温は-10℃以下であるが、南部では冬でも海水は発達せず、2月の平均気温が-5～-6℃とさほど寒くはない。植生はいわゆるツンドラで、草花や灌木(背丈の低い木)しか生えず、種類も限られている。陸に比べて海の生物は多様で、多くの魚類・鳥類・海獣類などが生息している。

海に浮かぶ氷塊や動植物の写真・ポスターを展示した。



<先史>

グリーンランドの最初の移住者は、約4,000年前から300年ほど続いたインデペンデンス文化を担っていた人びとである。この文化は島の北部からカナダの北東部にかけて広がっていたが、住居はテントだけで海獣類の脂肪を燃やす石ランプは開発されていなかったと考えられている。その後いくつかの文化期を経て、1000年頃に近現代のエスキモー文化の基礎となったチュール文化期が始まる。

チュール文化は、シベリアの東端と北西アラスカの周辺で発達して徐々に東へ進み、グリーンランドに到達したと考えられている。カヤックやウミアックといった皮船と犬ぞりの水陸の移動手段を備え、捕鯨などの高度な狩猟技術を伴った、寒冷な自然環境に最も適応した文化といえる。

グリーンランドと同様の先史文化をもつカナダ極北地域の遺跡(スチュアート・ヘンリ氏撮影)の写真、先史年表、石ランプ・カヤック・ウミアック・犬ぞりの模型を展示した。

また、西海岸中部で発見された約500年前のチュール文化期に死亡した人びとのミイラの写真とその研究成果についても紹介した。

そして、次のコーナーでは1940年代の男女の衣装、儀礼具、狩猟・漁労具などを展示し、極北での生活のあらましをご覧いただいた。

<歴史>

やや温暖だった900年代には、北欧からのバイキングの移住というもう一つの大きな人の流れがあった。南部地域で酪農などを営んでいた彼らの

末裔^{さい}は、再び寒冷になった1400年代に姿を消すが、チュール文化の担い手だったイヌイトの祖先はこの地に適応した。

それから約300年後の1721年、デンマーク・ノルウェー同君連合から宣教師が来島、布教と交易の拠点が設けられ、後にグリーンランドはデンマークの領土とされた。

100~150年前のグリーンランドの様子を描いた絵や写真を復刻した絵はがき28点を展示した。

<現在>

グリーンランドの人口の約8割は、イヌイトとしてのアイデンティティ（帰属意識）を持ち、エスキモー文化を受け継ぐ人びとである。第二次世界大戦後の政治・経済の立て直しとともに、島内では自治権獲得の気運が高まり、1979年に「デンマーク王国内において特別の民族社会を構成する」として内政自治が認められた。グリーンランド内における文化・産業・福祉・環境などに関する権限が国家から委譲され、外交や安全保障などの対外政策と通貨対策に関する事項以外は、ほとんど独自の立法と行政が行えることになっている。

街と住宅地の様子や市場、結婚式、カヤックの練習など暮らしぶりについて写真やビデオ（「イヌグイト 地球の膺^{へそ}の人びと」「ポーラー・イヌイトの氷下漁」）をとおして紹介した。

また、デンマーク本国からの博物館資料返還の動きやグリーンランドの博物館の展示や活動についても写真とポスターで紹介した。



* * *

今回は、常設展示を補完する意味もあって、伝統的な生活よりもむしろ現代の暮らしに重点をおき、デンマーク領の一地域としてヨーロッパ文化を受け入れながらも独自の文化を継承している状況をお伝えしたいと考えました。平成8年8月に

現地で撮影した写真60点あまりを中心に、グリーンランド国立博物館・文書館やデンマーク本国に住むイヌイト（グリーンランド出身者）の文化活動の拠点となっているグリーンランダーハウスからいただいたポスター（27点）も展示し、芸術や産業についても紹介しました。

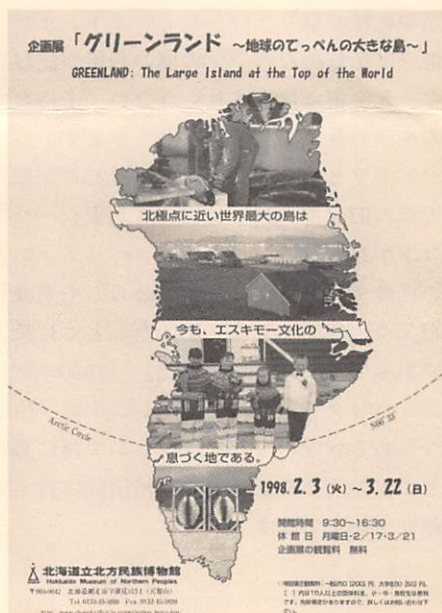
また、閲覧コーナーを設け、現地のパンフレットやグリーンランド観光局発行のガイドを手にとりご覧いただいたり、ノートにご意見ご感想などをお寄せいただきました。

このほか、3月1日の講座「グリーンランドの人と自然」では、スライド上映を中心に自然・歴史・文化の概要を紹介した後、展示室で解説を行いました。

2~3月は流氷観光の時期と重なることもあり、40日間の会期中2,300人あまりの観覧者を迎えることができました。感想ノートに目を通しますと、地元の方のみならず、本州や海外からの来館者も多く、日本で紹介される機会の少なかったグリーンランドについて知りたいと、企画展を目当てに来ていただいた方もいらっしゃったようです。そこでは、「寒くて暗いイメージが払拭された」「ヨーロッパ風の暮らしに驚いた」「ぜひ行ってみたい」などの感想が多くありました。

夏季の特別展に比べ、資料数も少なく小規模ではありましたが、現地調査の報告を兼ねた企画でもあり、わずかでも現在のグリーンランドの様子を感じていただけたのではないかと思います。

(学芸課 齋藤玲子)



ミュージアム映写室

講師 渡部 裕 (当館学芸課長)

映像上映と解説を通して北方民族の文化を紹介する「ミュージアム映写室」を開催しました。

「カヌーとカヤック」(1月25日開催)では北アメリカの獣皮船、樹皮船の製作工程や利用について紹介しました。カナダ北東部の針葉樹林帯のクリー・インディアンによる白樺樹皮製のカヌーの製作過程の記録、スレーブ・インディアンがかつてマッケンジー川で交易に利用していたヘラジカ皮張りの大型船の復元を記録した『最後のヘラジカ皮ボート』(1982年、カナダ国立映画制作庁ほか制作)およびカナダ・イヌイトによるカヤック製作を再現した映像の3作品を上映しました。どの映像にも限られた資源を利用して機能的にすぐれた船を造る技術が紹介されています。

「トーテムポールの森とニシンの海」(2月8日開催)ではサケ類やニシンなどの海洋資源に生活の基礎をおいてきたカナダ太平洋沿岸の北西海岸インディアンの文化を紹介しました。はじめの2作品は海岸サリッシュ、ベラ・クーラの伝統的な文化の側面を記録した1920年代の映像で、最後に上映した『ラサウエサ・ワ -川のカ-』(1995年、ニムキッシュ・ウインドプロダクション制作)では先住民の現代における海や川の資源利用とそれらの資源をめぐる先住民の意識、現代社会における課題や軋轢あつれきが取り上げられています。また、この映像では伝統的なニシンの卵の利用が記録されていて、北海道ではもう見られない「子持ちコンブ」の生産の状況を見ることができます。

「ツンドラとタイガの世界」(2月22日開催)では、近年の旧ソ連体制下における北東シベリア・チュコト半島東端のチュクチ、シベリア・エスキモーの伝統文化、工芸、近年の暮らしや意識を取材した3つの作品を上映しました。とくに最近の制作である『シレニキ村年代記』(1990年制作、アセン・バリクシ監督)ではペレストロイカが進行しつつある状況のなかで、シレニキ村に暮らす人びとの伝統文化や伝統的な経済活動に対する意識が紹介されています。

ヨーゼフ・クライナー氏

寄贈資料

ドイツ・ボン大学日本文化研究所所長ヨーゼフ・クライナー氏より写真資料計261点が寄贈されました。これらの写真は主に戦前の日本民族学会による千島列島しほしよ占守島における発掘調査と、サハリンの旧タライカ村近辺の先住民族を写したものです。このうち占守島おさむでの調査の写真には、民族・考古学者の故馬場脩氏の千島関係の論文に掲載されたものが多く含まれ、たてあな竪穴住居址の発掘前・発掘中・発掘後の様子や調査地点周辺の景色、出土遺物などが写されています。撮影された出土遺物のほとんどのものは現在「馬場コレクション」として市立函館博物館が所蔵、函館市北方民族資料館に展示・収蔵されています。サハリンの写真も同様に馬場氏のサハリン関係の論文に掲載されたものが含まれていて、サハリン・アイヌをはじめウイльтаヤニブフの住居やくらしの様子などが写されています。

クライナー氏によりますと、当資料は馬場氏から民族学者の故岡正雄氏へ、そしてウィーン大学名誉教授故スラヴィック氏に受け継がれてドイツに渡っていたものだそうですが、クライナー氏のご好意により、今回寄贈資料として再び日本に戻ってくることになりました。戦前に北千島やサハリン島南部でおこなわれていた民族・考古学的調査の記録写真として大変貴重なものであり、今後の研究にも役立てていきたいと思ひます。

(学芸課 稲垣はるな)

写真：占守島べつとま別飛から見たパラムシル島の山の遠景

■平成10年度北海道立北方民族博物館レクチャー

昨年度までの体験学習にかわって、今年度から学芸員による解説や映像資料の紹介を中心としたレクチャーを実施します。

対象：団体来館者（50名以内）

所用時間：各30分～1時間程度

料金：無料内容は以下の通りです。

- 1 北に住む人びとの暮らし：北に住む人びとの衣・食・住や、生活に必要な物資をどのようにして手に入れてきたかということについて広く紹介します。
- 2 北方民族の自然観：生活に深く関わっていた自然環境や動植物に対する北方諸民族の見方・考え方について解説します。
- 3 アイヌの歴史と文化：アイヌ文化とその歴史、人々の暮らしなどについて説明します。
- 4 オホーツク文化の人びと：かつて北海道のオホーツク海沿岸に栄えたオホーツク文化について紹介します。
- 5 北方民族の衣類：寒さに対する工夫や動物の皮の利用など、衣類の特徴について紹介します。
- 6 北方民族の食物：アザラシやトナカイ、サケなど、北方地域にみられる食材やその調理方法などについて解説します。
- 7 北方民族のすまい：寒さ対策や移動生活への対応など、北方の生活に合わせたすまいの工夫について解説します。
- 8 北方民族の生業：北方での生活基盤となっていた狩猟・漁撈・採集やトナカイ飼育について解説します。

※いずれも予約が必要ですので、事前に博物館までご連絡下さい。（都合によりご希望に添えない場合があります。）

■規則の改正について

「観覧料免除申請書」「特別利用申請書」「模写品等使用申請書」「貸出申請書」の押印に関して、一部規則が改正になりました。詳細はお問い合わせ下さい。（学芸課）

今号の表紙 — イヌぞり模型

イヌぞりは北方地域で広く用いられる移動手段の一つで、写真の資料はカムチャツカ半島の基部から中部にかけて居住してきたコリヤークのイヌぞりの模型です。二本の滑走板にはほぼ等間隔で4組の支柱が立てられ、前の部分には弓状の木杵が水平に皮ひもで結び付けられています。最前列の支柱の位置には弓状の木杵が垂直に取り付けられています。これは進行方向を調節するためのハンドルの役割を果たしています。ドライバーは左手でこの木杵を掴み、右手でブレーキを操作しました。実物のそりは滑走板の長さが3～3.5m、ハンドル部分の高さは1～1.2m程度で、木の部分、特に滑走板には主にシラカバ材が用いられていました。このそりの前部の木杵に引き綱を結び付け、それにイヌを2頭一組で6～7組、二列縦隊で繋ぎ、そりを引かせていました。このタイプのイヌぞりはコリヤークだけでなく、広くシベリア北東部に住む人びとの間でも使われていました。

みんぞく こうこ はくぶつかん in 北海道（1～3月）

※このコーナーでは当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 1/11 東京・国立劇場で古式舞踊公演：白老のアイヌ民族博物館の踊り手たちが踊りを披露/D
- 1/16 時絵漆椀が出土：余市町入舟遺跡のアイヌ民族墓地から女性の副葬品として江戸時代前期の大名道具が出土/D
- 1/31 解明進む先史文化：富良野で北の先史文化フォーラム開催、研究者が集う/D
- 2/3 紋別で北方圏国際シンポジウム：オホーツク文化についての講演も行われる/D
- 2/22 伝統の舞踊熱演：北見でアイヌ民族文化祭開催、伝統舞踊やアイヌ語劇が上演される/D
- 3/11 響けアイヌ民族の調べ：標茶町、エゾシカの腱で民族楽器トンコリの弦を伝統的手法で復元/D
- 3/12 焼失サンタン船復元：稚内で焼失した間宮林蔵の復元樺太探検船を再び復元/D

*D：北海道新聞
複数紙掲載の場合は扱いの大きい方を紹介しています。

■寄贈資料紹介

- ・「解説付き写真集幻の馴鹿部隊別冊補足編」が旭川市の河野廣氏から寄贈されました。
- ・塩入れほか：東京都の風間伸次郎氏からウデへの塩入れ・骨製サイコロ・動物の躰・ウリチの帯・ナーナイのすだれ・靴・ベリー・キノコ・薬用根・薬草各1点、敷物・切り絵各2点が寄贈されました。
- ・スライド：札幌市の津曲敏郎氏から中国内蒙古ホロンバイル盟で撮影したスライド1,177枚が寄贈されました。
- ・写真：ドイツ・ボン市のヨーゼフ・クライナー氏から写真の寄贈がありました。(4頁参照)
- ・木製さじほか：札幌市の谷本一之氏からサハの木製さじ1点、蚊よけ具1点が寄贈されました。
- ・カワカマスの乾燥頭部：札幌市の大島稔氏からロシア・スラウトノエのカワカマスの乾燥頭部1点が寄贈されました。

■執筆・出版社から贈呈を受けた書籍等(1~3月)

- ・安達裕之 1998 『日本の船 和船編』 船の科学館
- ・上野堅實 1998 『タバコの歴史』 大修館書店
- ・遠藤匡俊 1997 『アイヌと狩猟採集社会』 大明堂
- ・大島乙彦 1997 『北見の町の軍需工場 —アルコール工場の顛末—』 北見叢書
- ・大林太良 1998 『仮面と神話』 小学館
- ・小川早苗・かとうまちこ 1996

『アイヌ紋様を曾祖母から継いで五代』アイヌ文化伝承の会手づくりウタラ

- ・等々力政彦 1997 『T U V A — トゥバ』 BooxBox (CD-ROM)
- ・真貝四郎 1997 『前田駒次とその系譜』 北網圏北見文化センター協会
- ・宮岡伯人・津曲敏郎 編 1997 『環北太平洋の言語 3』 京都大学大学院文学研究科

■主な来館者(1~3月)

- 2/12 B B C (英国ラジオ局) 取材
- 2/13 カナダ姉妹都市交流訪問団
- 2/24 東北大学東北アジア研究センター 丸山宏 助教授
柳田賢二 助教授
- 3/20 東北学院大学 榎森進 教授

■その他の行事報告

- 1/24 博物館クラブ
「イヌイトの石版画」
- 2/1 講習会「イグルーブクリ」
- 2/14 博物館クラブ
「とんぼ玉教室」
- 2/15 講習会「とんぼ玉づくり」
- 1/27~2/1 博物館実務実習生1名受け入れ

■観覧者動向(1~3月)

	(名)	
	常設展示	企画展
1月	947	—
2月	1,923	1,428
3月	1,735	881
計	4,605	2,309

■友の会会員募集中

平成10年度友の会会員を募集中です。詳しくはお問い合わせ下さい。

■行事案内(5~7月)

- 5/5(祝・火)こどもクラフト工房
- 5/23(土)博物館クラブ
「イヌイトのヨーヨーづくり」
- 6/13(土)博物館クラブ「くらしに役立つ植物・観察会」
- 7/19(日)~9/27(日) 第13回特別展
「人、イヌと歩く
—イヌをめぐる民族誌—」
- 7/20(祝・月)講座
「人とイヌとの関わり」
- 7/25(土)博物館クラブ「さかなをだますルアーづくり」
- 7/29(水)講習会
「ウイルトのお人形づくり」

■職員の異動

- ・転出(4/1付)
副館長 木村俊昭
(北海道自治政策研修センターへ)
管理課主任 土井宏治
(北海道立社会教育総合センターへ)
- ・退職(3/31付)
管理課主査 板垣明男
- ・転入(4/1付)
副館長 吉田耕司
(北海道立社会教育総合センターより)
管理課主事 山藤武徳
(胆振教育局より)
- ・採用(4/1付)
管理課主査 佐久間俊雄
(網走市農業委員会より)

■編集後記

今号より担当がかわりました。よろしく願います。(稲垣)